

Title	難波宮から藤原宮へ：日本古代宮都の成立過程をめぐって
Author	中尾, 芳治
Citation	市大日本史. 13 卷, p.1-17.
Issue Date	2010-05
ISSN	1348-4508
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学日本史学会
Description	

Placed on: Osaka City University

難波宮から藤原宮へ

—日本古代宮都の成立過程をめぐって—

中尾 芳 治

はじめに

只今ご紹介いただきました中尾でございます。

みなさんよくご存知のように難波宮跡の調査・研究は、一九五二年（昭和二七）の「大阪城址研究会」以来、大阪市立大学との密接な連携のもとに大きな成果を上げてきました。私は一九六〇年（昭和三五）二月から難波宮跡の発掘調査に従事するようになりましたが、山根徳太郎先生、浅野清先生、直木孝次郎先生など大阪市大の先生方から長年にわたって大変大きな教えを受けてきました。また、大阪市大の考古学研究会のみなさんには長年にわたって発掘調査で大変お世話になりました。その伝統ある考古研が最近廃部になったと聞いて本当に残念に思っています。個人的にも一九八六年（昭和六一）から一九九五年（平成七）まで非常勤講師を務めさせていただき、また本日講演の機会を与えていただいで大変に光榮に思っております。

これまで公私ともにお世話になりました大阪市大の諸先生や皆様方

にこの席をお借りしまして心からお礼を申し上げます。

短い時間ではありますが、難波宮から飛鳥宮を経て藤原宮が成立するまでの日本古代宮都の成立過程をめぐるといくなつかの問題点について私の考えるところをお話したいと思います。

図1に示されるように、藤原京が現在文献史的にも考古学的にも確認できる最初の条坊制都城であり、その後平城京、長岡京、平安京へと変遷していくわけですが、こうした藤原京や藤原宮は七世紀後半に突如として出現したわけではなく、それに至る七世紀の日本古代宮都の変遷過程が存在します。

藤原宮に先立つ七世紀代の日本古代宮都の考古学的な調査は難波宮跡（一九五四年）と飛鳥宮跡（一九五九）を中心に一九五〇年代から長年にわたって続けられ、大きな成果を挙げてきました。

現在、前期難波宮跡から飛鳥宮跡Ⅰ期遺構、飛鳥宮跡Ⅱ期遺構、飛鳥宮跡Ⅲ—A期遺構、飛鳥宮跡Ⅲ—B期遺構を経て藤原宮に至る変遷が明らかになりました。飛鳥宮跡Ⅰ・Ⅱ期遺構はⅢ期遺構と重複して

いるため遺構の実態はよく分かりませんが、前期難波宮跡が孝徳天皇の難波長柄豊碕宮、飛鳥宮跡Ⅰ期遺構が舒明天皇の飛鳥岡本宮、飛鳥宮跡Ⅱ期遺構が皇極天皇の飛鳥板蓋宮、飛鳥宮跡Ⅲ—A期遺構が斉明天皇の後飛鳥岡本宮、飛鳥宮跡Ⅲ—B期遺構が天武・持統天皇の「飛鳥浄御原宮」の遺構と考えられることもほぼ確実になりました。

図2は、七世紀の宮都の変遷図ですが、前期難波宮は古代宮都の中で最大の規模を持つ内裏南門を境に北の内裏地域と南の朝堂院地域に

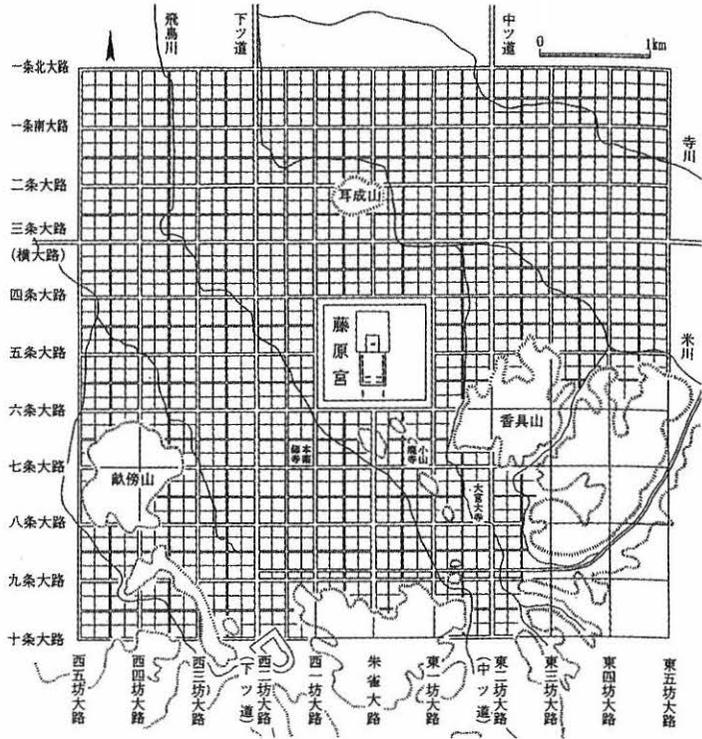


図1 藤原京復元図

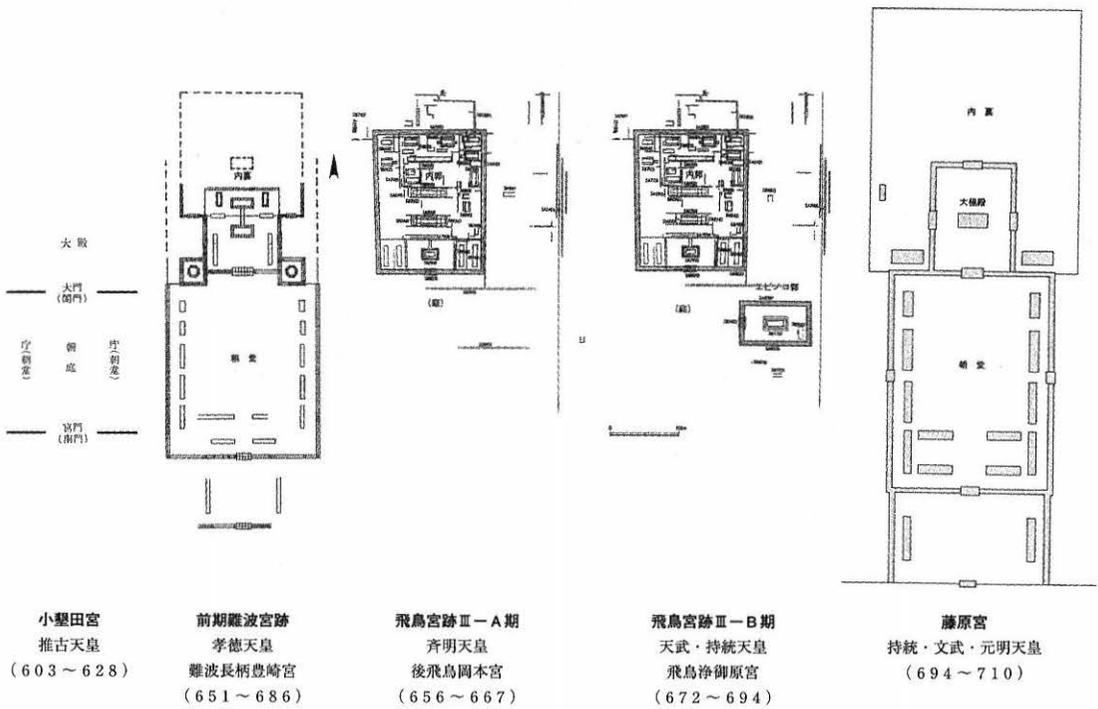


図2 7世紀宮都の変遷

二分されています。推古天皇の小墾田宮の古い段階では内裏の正殿は「大殿」一つだけでしたが、前期難波宮（長柄豊碕宮）になりますと公的な場である「内裏前殿」と私的な場である「内裏後殿」に機能が分かれます。まだ発見されていませんが、「内裏後殿」の後にも正殿が存在した可能性がありますので、内裏には合計三つの正殿があったこととなります。

飛鳥宮跡Ⅲ—A・B期のいわゆる「内郭」部分は前期難波宮の内裏に相当する部分に当たり、前期難波宮と同じく南北に三つの正殿が並んでいます。

Ⅲ—B期（飛鳥浄御原宮）は、Ⅲ—A期（後飛鳥岡本宮）の東南部に「東南郭」を追加建設したもので、その正殿が東南郭正殿あるいは小字名をとって「エビノコ郭」「エビノコ大殿」と呼ばれているものがあります。この建物が藤原宮の大極殿に先立つ「大極殿」になるのかどうか大きな問題になっております。

この図を見て分かるのは、前期難波宮と藤原宮大極殿・朝堂院の規模・構造がきわめてよく似ているということです。飛鳥宮に前期難波宮や藤原宮の朝堂院に相当する部分がないことであります。

前期難波宮や飛鳥の諸宮の年代や官号比定が可能になってきたことによって、前期難波宮から飛鳥の諸宮を経て藤原宮に至る日本古代宮都の成立過程をめぐる論議が活発になっています。

一 前期難波宮をめぐる

（1）年代と官号比定

この中でまず注目されるのが前期難波宮であります。図3は上町台地先端部の旧地形と前期難波宮の立地を示したものです。前期難波宮が上町台地の先端部の最高所の平坦部を選び、七世紀の中ごろに数多くの谷筋を大々的に整地して造営されたことがよく分かります。

前期難波宮跡の造営年代については孝徳朝説と天武朝説があり、「大改新論争」とも関連して注目されてきました。古代の遺跡の年代の推定に当たっては普通は一緒に出土する瓦や土器の年代を参考にし決めていくのですが、前期難波宮の場合、瓦葺きではないので瓦が出土しないこと、これまで発掘されたのが内裏・朝堂院などの遺物の出土が少ない中核部分であったこと、奈良時代の難波宮再建時に前期難波宮の旧地表が削られていることもあって当時の土器が出土しないことなどが前期難波宮の造営年代の決定を難しくしていました。

私はこれまでの考古学的調査の成果、特に前期難波宮造営に伴う整地層や造営工事によって埋め立てられた「難波宮下層遺跡」から出土する土器の年代と文献史料との総合的理解の上に立って前期難波宮跡が孝徳朝の難波長柄豊碕宮の遺構であることを主張し、考古学研究者の多くや文献史の研究者の賛同が次第に得られるようになりましたが、土器の型式に基づく考古学的な年代観に懐疑や不信感をもつ研究者がまだ残っていました。

その後一九九七年（平成九）に内裏西方倉庫群に伴う水利遺構から多数の土器群が出土するなど前期難波宮の年代の基準資料が増加したことによって難波地域の土器編年がさらに検証され、七・八世紀の飛鳥・藤原地域や大阪府陶邑古窯跡群の土器編年とも整合する精緻な土器編年に基づいて前期難波宮跡を孝徳朝の難波長柄豊碕宮に比定する研究が進みました（図4）。

さらに一九九九年（平成一一）秋、前期難波宮北西部に当たる谷部の

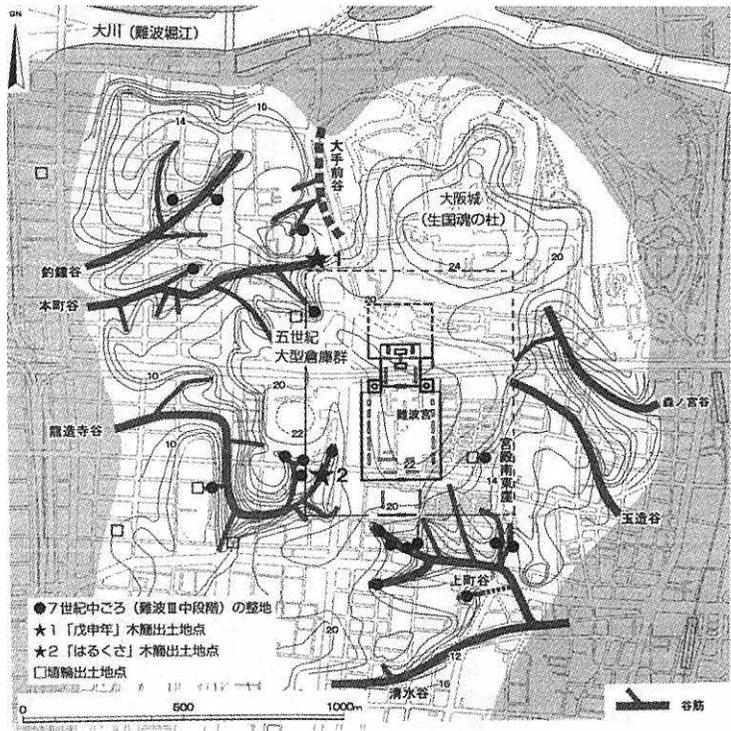


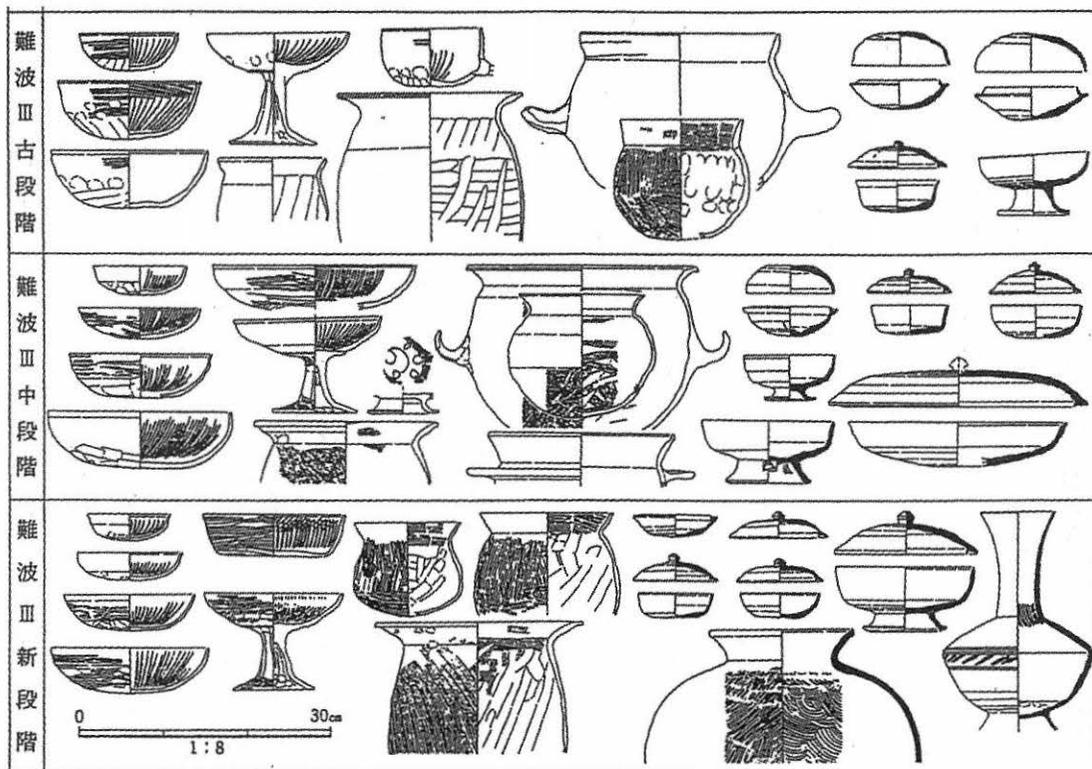
図3 上町台地先端部の旧地形と前期難波宮の立地

下層から六四八年（大化四）に当たる「戊申年」木簡を含む贅木簡や評木簡など三三点の木簡が出土したことは、前期難波宮跡が孝徳朝の難波長柄豊碕宮である可能性を一層高めるものであり、考古学的な年代観に懐疑的であった文献史の研究者にも孝徳朝説が支持される大きな契機になりました。現在、前期難波宮Ⅱ難波長柄豊碕宮説は「通説」となっています。

（2）難波長柄豊碕宮の造営過程——「二段階説」をめぐる

難波長柄豊碕宮の造営過程に関して私は「大化元年十二月、都を難波長柄豊碕に遷す」とあることから、この時に造営の地が定められ、小郡や大郡を仮宮として改修する工事と並行して難波長柄豊碕宮の造営を目指した基盤整備や基礎地業のための工事がスタートしたと考えられています。

図3に見られるように「長柄豊碕」の地を宮の地とするための大々的な整地工事をはじめ飛鳥の地から移り住む豪族や官人たちの邸宅・住居のための造成工事、難波と飛鳥をつなぐ「難波大道」の建設、難波津などの港湾整備などを含むインフラ工事が大化二年からスタートしたと思います。「大化二年三月条、新宮を造るために農月に民を使役することもやむを得ない」や「大化三年是歳条、工人荒田井比羅夫が誤って溝瀆（みぞ）を掘って難波に引き入れ、百姓を疲弊させた」の記事は、新宮（難波長柄豊碕宮）の造成工事にかかわるものと考えられます。そうしたインフラ工事の過程を経て、白雉元年十月条に「宮の



七
拾
九
年
申
年

戊
申
年

様式	標識資料	京嶋編年	南編年	都城編年	暦年代
難波Ⅰ	NW80-9次SK201-202 倉庫群関連				5世紀
難波Ⅱ古	SB214埋土下部・上部		1期古相・新相		6世紀
新	NW93次SK9343 NW14次東地区堅穴	I期	2期 3期	飛鳥Ⅰ	6世紀後半～7世紀初
難波Ⅲ古	NW66次方形土壇	Ⅱ期	4期		7世紀前半
中	NW100次SK10043 SK223・水利施設第7層	Ⅲ期	5期	飛鳥Ⅱ	7世紀中葉
新	DB91-1次SD801	Ⅳ期		飛鳥Ⅲ 飛鳥Ⅳ	7世紀中葉～後半
難波Ⅳ古	MR94-7次SD701			飛鳥Ⅴ～平城宮Ⅱ	7世紀末～8世紀初
新	OS92-74次Ⅲ8層			平城宮Ⅲ	8世紀前半～中葉
難波Ⅴ古	OS90-50次溝 OS91-32次土壇1・2			平城宮Ⅳ～Ⅴ	8世紀後半
中	OS87-29次井戸 府センター調査溝1				
新	OS90-50次東井戸 OJ92-22次SK04			平城宮Ⅵ/平安京Ⅰ中	8世紀末～9世紀初

時期区分と標識資料

(佐藤 隆「古代難波地域の土器様相とその史的背景」『難波宮址の研究』第11より)

「戊申年」(648・大化4)紀年銘木簡

図4 古代難波地域の土器編年

地に入ったために墓や住居を移された人々に補償し、宮の堺の標（しるし）を立てた」とあるようにこの時から新宮殿の建築工事にかかり、白雉二年十二月にその地名をとって「難波長柄豊碕宮」と命名、最終的に白雉三年九月に宮殿が完成したと考えています。

それに対し吉川真司さんは、まず第一段階として大化元年冬から小郡宮の造作を開始して大化三年秋冬頃に竣工。次いで大化五年の立評、中央官制の整備、政権首脳部の一新などを受けて大化五年秋冬頃から豊碕宮の整地と造営が始まり、白雉三年九月に完成したとする「二段階説」をとっております（吉川一九九七）。

私は難波遷都の本命は当初から難波長柄豊碕宮であり、小郡宮は小郡を改修した豊碕宮完成までのいわば「仮宮」的存在であったと考えられています。

難波遷都に伴って多くの宮号が登場しますが、子代離宮＝小郡宮（直木孝次郎・吉川真司）、味経宮＝豊碕宮（吉川真司）、難波碕宮＝豊碕宮（西本昌弘）など各氏の意見があり、また白雉元年十月条の記事についても「造営の開始を意味する記事ではなく、造営がほぼ一段落したことをしめす」とする西本昌弘さんの意見もあります。長柄豊碕宮の造営過程については今後さらに再検討・再構成したいと思っています。

（3）難波長柄豊碕宮と中国都城制

孝徳朝における唐制を志向した官制や礼制の存在からみて長柄豊碕宮の造営に当たっても隋・唐長安城の都城制が参考にされた可能性が

高いと考えていますが、いざどこがそうなのかということになるとなかなかよく分かりません。そこで私が注目したのは長柄豊碕宮の内裏南門がなぜあんなに大きいのかということでありました。

表1を見ていただきたいのですが、内裏南門は七×二間でその平面積は日本古代宮都の中で最大の大きさを持っています。もちろん内裏の南門は単なる出入り口ではなく、朝庭で儀礼がおこなわれる場合に天皇が出御する場でもありますから当然大きく、正殿的性格を持つわけですが、それにしても大きすぎないか。現在藤原宮の大極殿院南門が内裏南門に次ぐ大きさを持っていることが分かっていますが、かつては平城宮の大極殿院南門同様五×二間の規模と考えられていました。

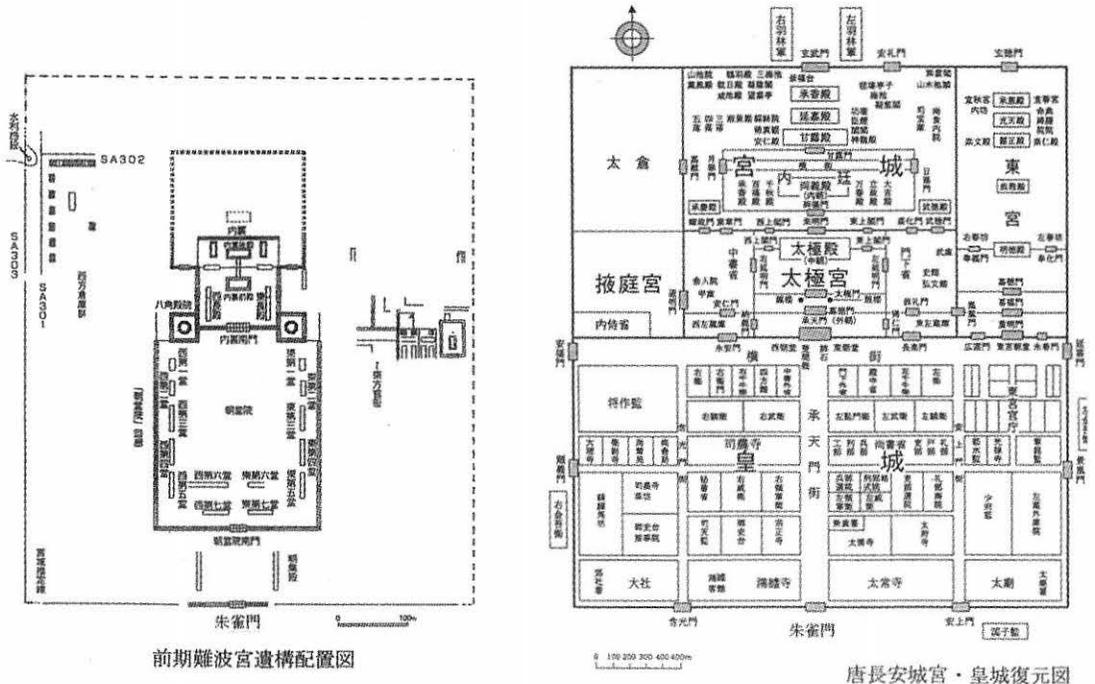
ちょうどその頃、一九八八年（昭和六三）に佐竹昭さんが「藤原宮の朝庭と赦宥儀礼―古代宮室構造展開の一試論―」（『日本歴史』四七八号）を発表されて、大宝元年十一月乙酉条の記事を史料として、藤原宮の大極殿門外の朝庭で行われていた大宝以前の赦宥儀礼は唐代の赦宥儀礼の影響下に成立したもので、藤原宮大極殿門は唐三朝制の外朝に当たる唐太極宮承天門の機能の一部を受容したものであることを明らかにされました。唐代の承天門は外朝正殿として、「元旦・冬至の儀式、宴会、赦宥、新制の施行、外国使節の応待などの時、天子は承天門に御して政を聴く」所であります。

一方、長柄豊碕宮の内裏南門と藤原宮の大極殿院南門を対比した時、内裏南門が大極殿院南門に当たることを考えると、内裏南門の巨大性と正殿的な性格は、唐三朝制における外朝正殿としての承天門の性格

表1 宮城諸門の規模比較

宮名	建物名	規模(間)	寸法(m)	平面積(m ²)
前期難波宮	内裏前殿 (SB1801)	○9×5	36.6×19.0	695.4
	内裏後殿 (SB1603)	○9×5	34.3×14.6	500.8
	内裏南門 (SB3301)	○7×2	32.7×12.3	402.2
	朝堂院南門 (SB4501)	○5×2	23.4×8.8	205.9
	宮南面中門 (朱雀門)	○5×2	23.4×8.8	205.9
大津宮	内裏南門 (SB001)	○7×2	21.2×6.3	133.6
後飛鳥岡本宮 (Ⅲ-A期)	内郭南院南門 (SB8010)	○5×2	14.8×5.4	79.9
飛鳥浄御原宮 (Ⅲ-B期)	エビノコ郭西門 (SB7402)	○5×2	14.8×5.4	79.9
藤原宮	大極殿院南門	7×2	35.1×10.0	351.0
	朝堂院南門	5×2	(24.6×10.2)	(250.9)
	宮南面中門	5×2	25.5×10.1	257.6
平城宮	第1次大極殿院南門	5×2	(23.8×11.8)	(280.8)
	朱雀門	5×2	25.3×10.1	255.5
	第2次大極殿院南門	5×2	22.1×8.9	196.7
	同上 下層門	○5×2	19.2×8.9	170.9
	第2次朝堂院南門	5×2	19.5×7.2	140.0
	同上 下層門	○5×2	19.5×7.2	140.0
	羅城門	(7×2)	(34.0×8.9)	(302.6)
長岡宮	大極殿院南門	5×2	(22.5×9.0)	(202.5)

○印は掘立柱建物 ()内数値は復元値



前期難波宮遺構配置図

唐長安城宮・皇城復元図

図5 唐長安城太極宮・皇城と前期難波宮

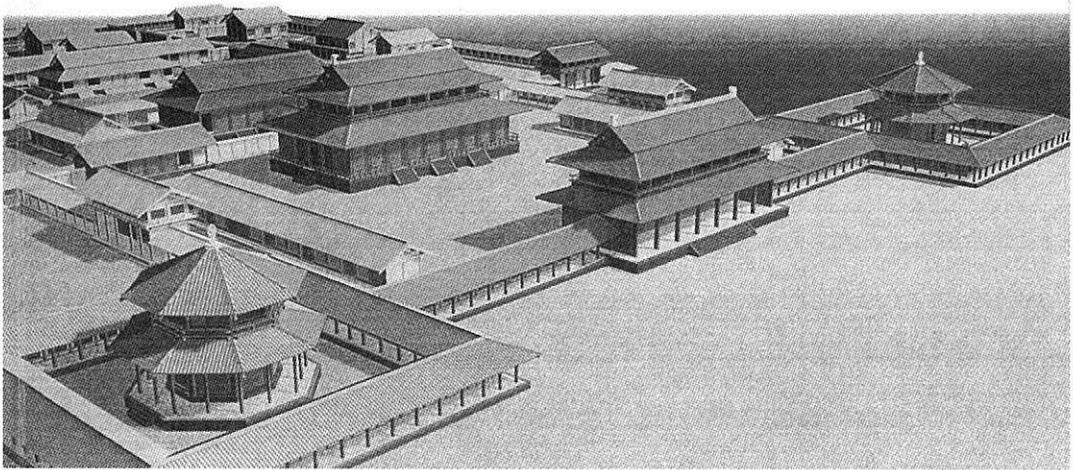


図6 前期難波宮内裏建物の復元

を受容した結果ではないか、藤原宮の大極殿院南門はその内裏南門の規模と性格を継承したもので、引いては前期難波宮中枢部の構造は唐三朝制（外・中・内朝）をモデルに造営されたものではないかということを考えてわけです（図5）。最近の発掘調査で藤原宮の大極殿院南門が内裏南門と同じ七×二間の規模であることが明らかにされ、その継承関係が実証されました。

大化五年三月、孝徳天皇は「朱雀門」に御して阿倍左大臣の死を悼んで「挙哀」したとあります。「朱雀門」の

名は後世の潤色と考えられているようですが、「刑部尚書・衛部・将作大匠・祠官頭」などの唐風官職名とおなじく唐長安城皇城の正門「朱雀門」の名が豊碕宮に付けられた可能性があると思っています。

図6は私たち発掘調査関係者と日本建築史の鈴木嘉吉さん、中国建築史の田中淡さん、文化財建造物保存技術協会の専門家の方々との共同研究によって復元された前期難波宮の宮殿図で、大阪歴史博物館に展示されている復元模型の設計図として造られたものであります。決定的なものではありませんが、前期難波宮の建築が掘立柱で瓦を葺かない伝統的な建築でありながら、きわめて中国風の装いをこらしていた可能性を示すものであります。

六世紀末に始まる隋・唐の中国統一と朝鮮半島における高句麗・百濟・新羅三国の騒乱を契機にして政治的・軍事的に緊張の高まった東アジアの国際情勢に対処するために朝鮮三国や日本では権力の集中をめざして政変がおこり、政治改革が目指されます。

六四五年の蘇我入鹿の暗殺事件（乙巳の変）は、こうした国際的な状況の中で日本ではどのような形の権力集中を目指すかという問題と、それと密接に関係する皇位継承をめぐる起こった事件であると思います。

この乙巳の変をきっかけにして成立した孝徳天皇の政権は、唐の制度に倣った官職や儀礼を取り入れて国の制度を整備するとともに、図5に対比して示しておりますように唐の都である長安城の太極宮の都城制を取り入れて難波長柄豊碕宮を造営したと考えております。

空前の規模を持ち、これまでに見られなかった中国風の大宮殿は、

広大な朝堂院の朝廷に全国から集まった豪族たちや朝鮮三国の使節たちの目を驚かせ、天皇を頂点とする中央集権的な権威と秩序を誇示する舞台装置になったと思います。

二 天武天皇の新都造営と難波宮の整備

(1) 「飛鳥浄御原宮」の造営と東南郭正殿（エビノコ大殿）

表2は、天武天皇の新城＝新しい都の造営と天武朝における難波宮整備にかかわる記事を並べたものであります。

六七二年、壬申の乱に勝利した大海人皇子は飛鳥に凱旋し、齊明天皇の後飛鳥岡本宮（Ⅲ―A期）の南に新宮を造り、以後ここで政治を執ることとなります。その宮の実態は飛鳥宮跡Ⅲ―B期の遺構に示されています。この宮は一般的には「飛鳥浄御原宮」と呼ばれていますが、この名前は天武の病の平癒を願って天武が死去する二ヶ月前の六八六年（朱鳥元年）七月になって付けられたのであり、それまでは後飛鳥岡本宮の「旧宮」に対し「新宮」と呼ばれていたと思われまます。

古代における「歴代遷宮」制は、七世紀になると宮室の地は飛鳥の地に固定されるようになりますが、宮殿は舒明天皇の飛鳥岡本宮、皇極天皇の飛鳥板蓋宮、孝徳天皇の難波長柄豊碓宮、齊明天皇の後飛鳥岡本宮というように建て替えられていて、「歴代遷宮」の遺制が残っていたと思われまます。ひとり天武天皇だけが齊明天皇の後飛鳥岡本宮を全面的に建て替えるのではなく、いわば間借りするような形になっているわけですが、天武は自分自身の新しい都である「新城」の造営

表2 天武天皇の新城造営と難波宮

六七二年（天武元）	壬申の乱。
六七三年（天武二）	是歳 宮室を岡本宮の南に造る。
六七六年（天武五）	二月 天武天皇即位。
六七七年（天武六）	九月 是歳、新城の造営を計画。
六七九年（天武八）	一〇月 内大錦下丹比公麻呂、摂津職大夫になる。
六八〇年（天武九）	一月 難波に羅城を築く。
六八二年（天武一一）	一月 皇后の病回復を願ひ、薬師寺建立に着手。
六八三年（天武一二）	三月 天武天皇、新城に行幸。
	七月 新城を巡行。
	一一月 復都制の詔、難波を都とする。
六八四年（天武一三）	二月 信濃に遣使して造都地を視察させ
	三月 天武天皇、京師を巡行して、宮室の地を定める。
六八六年（朱鳥元）	正月 大蔵省より失火して難波宮全焼。
	七月 宮を飛鳥浄御原宮と命名。
	九月 天武天皇、死去。

を計画していたので、後飛鳥岡本宮を全面的に建て替えるのではなく、その代わりにとりあえず自分の御在所である「大安殿」を新築してそこで政治を執ることにしたのではないかと思うのです。東南郭正殿（エビノコ大殿）で重要な政治を行うなかで、また齊明天皇の「大安殿」と区別する意味で「大極殿」と呼ばれることがあった可能性があります。が、東南郭正殿の本質は「大安殿」であったと思つていきます。

極論かもしれませんが、私は「飛鳥浄御原宮」というのは天武が自分の都として完成を目指した「新城」すなわち「藤原京」造営のための仮宮的な存在であったために正式の宮号の命名が天武死去の直前ま

で遅れることになったのではないかと考えています。

孝徳朝の難波長柄豊碕宮の造営にあたっては小郡を小郡宮に改修し、そこで政治を執りながら豊碕宮の完成を目指したと相通じる点があるように思います。大化改新の難波遷都や長柄豊碕宮の造営に関しては、孝徳政権の一員として何らかのかわりを持ち、その過程や唐制を志向して造営された長柄豊碕宮の実態をよく知っていた天武（大海人皇子）は、自分自身の新しい都の建設にあたってそれらの経験を活かしたものと思われれます。

とりあえず、この「新宮」で即位した天武天皇は六七六年（天武五年）から自分自身の新しい都（「新城」＝藤原京）の建設に着手します。六八〇年（天武九年）、天武が皇后鸕野讃良（うののさらら）の病回復を願って建立に着手した薬師寺は、その遺跡が本薬師寺跡として残っていますが、発掘調査の結果では藤原京の条坊地割に規制される形で建立されており、藤原京の造営が進んでいたことをうかがわせます。

一方で、天武は中国の複数の都をおく制度を取り入れて、孝徳朝の難波長柄豊碕宮が存続し、交通・経済・外交の要衝である難波の地を藤原京と並ぶ都として復活させるために、難波宮と難波の地の整備に努め、六八三年（天武二年）には「複都制の詔」を出して先ず難波宮を都にいたします。

「都城宮室は一処に非ず、必ず両参に造らん」という天武の複都制の構想については「日本を西国、中央部、東国に三分してそれぞれに難波宮、藤原京、信濃宮を配し、この三つの宮が一次的にそれぞれの

地域を統括するとともに、中央の藤原京が二次的に日本全体を統括する、という二段階の支配構造をめざすものであった」とする柴原永遠男さんのお考え（柴原二〇〇三）に私も賛成です。詔の後半部分「故、先ず難波を都とせんと欲う。是を以つて、百寮の者、各往りて家地を請え」は、都としての実態のあった難波宮を「先ず」都とし、本命の藤原京の造営を督励したもので、翌年の六八四年（天武十三年）に天武は京師を巡行して、宮室の地を定めており、このころ天武が目指していた新しい都の基本計画は出来上がっていたと思われれます。

結局、天武は自分の理想とする新しい都の完成をみることなく亡くなり、その遺志を継いだ皇后の持統天皇によって藤原京は完成させられることとなります。

（2）難波長柄豊碕宮と藤原宮

図7・表3は、前期難波宮、「飛鳥浄御原宮」、藤原宮の中枢部の平面を比較したのですが、一見して前期難波宮と藤原宮の間に密接な関係があることが分かります。まず類似点として

① 朝堂院と大極殿院のそれぞれの東西幅がほぼ等しく、両者の比が二対一になっています。

② 内裏前殿・大極殿を囲む回廊の東・西・南門が存在し、特に南門の規模が歴代の宮城の中でも飛びぬけて大きいことが注目されます。

③ 内裏・大極殿部分が内裏外郭と内郭の二重構造になっていること。

④ 内裏南門の両側に前期難波宮では八角楼殿が、藤原宮でも東西の

表3 前期難波宮と藤原宮の類似点と相違点

	前期難波宮	藤原宮
類似点		
朝堂院の東西幅	233.4m	235.8m
大極殿院の東西幅	114.6m	約118m
巨大な大極殿南門	7×2間	7×2間
大極殿院東・西門	5×2間	7×2間
多数の朝堂	14堂	12堂
朝堂の規模・構造	第一堂 5×3間 (55×27尺) 第二堂 7×3間 (70×24尺) (第二堂以下、床張り建物の可能性) 第三堂以下 12×2間(120×20尺)	9×4間 (118×48尺) (四面庇) 15×5間 (210×38尺) (二面庇・孫庇) (第二堂以下、床張り建物の可能性) 15×4間 (210×38尺) (二面庇)
東・西楼閣の存在	東・西八角殿	東・西楼
朝集殿の存在	東・西朝集殿	東・西朝集殿
宮城門(朱雀門)	翼廊形式	翼廊形式?
内裏外郭	掘立柱塀	掘立柱塀
相違点		
建築様式	伝統的な掘立柱建築 (基壇建物の可能性)	中国的な礎石・瓦葺き建築
大極殿院	内裏前殿と東・西長殿	大極殿のみ (天皇の独占空間)

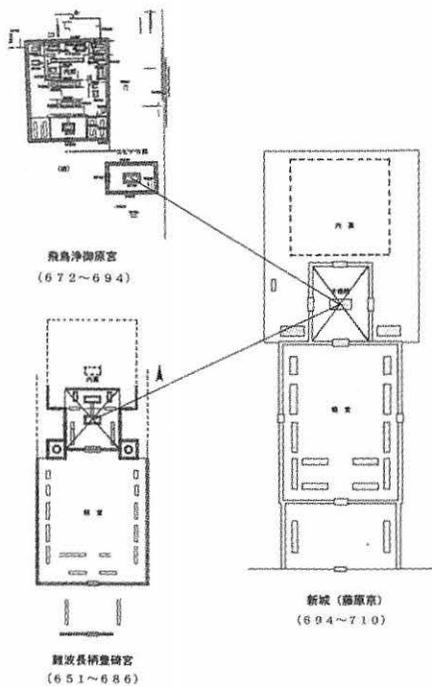


図7 長柄豊碓宮・飛鳥浄御原宮・藤原宮中枢部比較図

以上のように両者の規模・構造には密接な関係があることがわかります。前期難波宮・藤原宮ともに宮域の周囲は一本柱の塀で区画されていますが、前期難波宮の「朱雀門」の両側は複廊がとりつく翼廊形式になっているのが大きな特徴です。藤原宮の「朱雀門」では一部が

- 楼殿があります。
- ⑤ ともに広大な朝堂院があります。広い朝庭を囲んで前期難波宮では少なくとも一四、藤原宮では一二という多数の朝堂が存在していますが、第一・二堂と第三堂以下の朝堂の規模や建築様式が区別されていることが共通しています。
- ⑥ 朝堂院の南に朝集堂が存在すること。
- ⑦ 「朱雀門」の両側が「翼廊」という特別の型式になっていること。
- ⑧ 内裏前殿・大極殿の位置がそれを囲む回廊の対角線の交点にくるように計画されていること(植木二〇〇九)。

未発掘のため未確認ですが、一本柱の扉ではなく単廊あるいは複廊の回廊がとりついていた可能性が指摘されています。

相違点としては、前期難波宮や飛鳥宮Ⅲ—A・B期が全て掘立柱で瓦を葺かない伝統的な建築様式であるのに対し、藤原宮は日本で最初の瓦葺き宮殿として知られるように、礎石建ち・瓦葺きの中国的な建築様式であることが挙げられます。また、前期難波宮の内裏前殿の前には東・西長殿が存在して、臣下のものが内裏前殿の区域に参入することがあったのに対し、藤原宮の大極殿院は大極殿のみが存する天皇の独占空間であることが重要な違いであります。相違点は造営年代の時期差、発展の段階差によるものと思われれます。

後でも触れますが、前期難波宮は掘立柱で瓦を葺かない伝統的な建築でありながら、基壇を持つ土間式の中国的な建築であった可能性があり、その規模の大きさとともに中国都城制の影響が考えられます。

前期難波宮と藤原宮の中心部に共通する要素の多いことは、天武自身の新しい宮室の造営にあたって、当時難波に存在していた長柄豊碓宮をモデルにした可能性が極めて高いと思います。

藤原宮の中枢部の状況は飛鳥宮Ⅲ—B遺構の東南郭と前期難波宮の朝堂院を合成して成立したのではなく、「新宮」造営当時難波に現存し、天武の複都制構想の対象として藤原京の造営と並行して整備が進められていた前期難波宮（難波長柄豊碓宮）を直接的なモデルとして藤原宮が造営されたと考えています。

三 大極殿の成立と系譜

(1) 大極殿の成立

「飛鳥浄御原宮」は、斉明天皇の後飛鳥岡本宮の東南に「東南郭」（エビノコ郭）を付け加えたものを指していますが、『日本書紀』には浄御原宮の宮殿名として「大安殿・外安殿・内安殿」などともに律令の制定や後の『古事記・日本書紀』につながる歴史書の編纂を命じた重要な宮殿として、また王族や貴族に対する賜宴の場として四度にわたって「大極殿」の名が出てきます。

大極殿は朝堂院の正殿で、文献史料的にも考古学的にも確認できる最初の大極殿は藤原宮の大極殿で、浄御原宮における「大極殿」の名は、後世の追記あるいは潤色と考えるのが従来の通説でした。それに対して飛鳥宮跡の発掘を担当されている林部均さんは、エビノコ郭の正殿であるエビノコ大殿を「大極殿」と考え、飛鳥浄御原宮において新しい機能や性格をもった「大極殿」が成立したことを高く評価されています。

浄御原宮の「大極殿」では、詔の発布や賜宴に際して親王・諸王や諸臣を呼びいれており、天皇の独占空間になっていないことは藤原宮の大極殿との大きな違いであります。

私は推古天皇の小墾田宮の段階では一つであった内裏の正殿「大殿」（おとの）の機能が公的機能の場である「内裏前殿」と私的機能の場である「内裏後殿」に分化したのが長柄豊碓宮の段階で、「内裏前殿」

は「大安殿」と呼ばれていたと考えています。

後飛鳥岡本宮の遺構である飛鳥宮Ⅲ—A期のこの正殿(PT300)は前期難波宮の内裏前殿の系譜をひくもので、斉明天皇の「大安殿」に当たるものですが、この東南郭正殿(エビノコ大殿)は、本来天武天皇の「大安殿」として造られたものではないかと思っています。

東南郭正殿は九×五間、梁間三間の身舎の四面に庇をめぐらした高床の建物に復元されていますが、山本忠尚さんはこうした「梁間三間四面庇付き建物」の類例を広く収集して検討を加え、結論として七世紀中ごろの前期難波宮から奈良時代を経て平安時代に至るまで天皇が居住する建物(御在所)は、一貫して「梁間三間四面庇付き建物」であったとして、同じ構造を持つ東南郭正殿は大極殿ではあり得ず、大極殿は藤原宮の段階で成立したと考えておられます(山本二〇〇四)。

藤原宮大極殿は、難波長柄豊碕宮の内裏前殿(大安殿)の系譜を引き、内裏前殿や飛鳥宮Ⅲ—B期遺構(飛鳥浄御原宮)の東南郭正殿の公的機能を天皇の独占空間として、公的儀礼の場として純化したものがあります。礎石建ち・瓦葺きで「梁間二間四面庇付建物」の建築構造やその外観は、東南郭正殿を質量ともに大きく飛躍するものであり、律令制の大極殿として装いを新たにして成立したものであると私は考えています。

ところで「内裏後殿」の性格について私は推古朝の小墾田宮の段階の「大殿」の公的機能が豊碕宮の「内裏前殿」に、私的機能が「内裏後殿」に継承されたと考えていますが、「内裏前殿」と軒廊でつなが

れ、前庭を有しない「内裏後殿」は正殿ではあり得ず、「内裏前殿」は奈良時代以降の大極殿後殿(小安殿)に当たる殿舎ではないかという考えがあります(植木二〇〇九)。

私は内裏前殿区とは塀と建物で区画され、内裏前殿に次ぐ規模と「梁間三間四面庇付建物」の構造を持つ内裏後殿はやはり正殿であるが、「内裏前殿」との関係が密接あるいは「内裏前殿」からの分化が不徹底の段階を示すのではないかと考えています。ちなみに藤原宮大極殿の後方に後殿的建物は存在していません。

「内裏後殿」と東・西脇殿は、奈良時代以降の内裏正殿(紫宸殿)を囲む一郭と共通するところもあり、私は「内裏後殿」区以北部分が後の内裏区画に分離・発展していくのではないかと考えています。なお、未発掘ではありますが、「内裏後殿」の背後に「正殿」の存在が予測でき、前期難波宮の内裏の構造については今後も慎重な検討が必要であると思います。

(2) 大極殿の系譜

図8は前期難波宮の内裏前殿、飛鳥宮Ⅲ—B期の東南郭正殿、藤原宮の復元図とそれぞれの建物の平面図を示したものです。

確実な大極殿の例である藤原宮・平城宮・後期難波宮・長岡宮・平安宮のいずれの場合もその建物の平面は、ここに示されるように「梁間二間四面庇付建物」で、基壇の上に立つ礎石建ち・瓦葺きの中国的な大建築になっています。それに対し本来内裏の正殿である「大安殿」

の平面は「梁間三間四面庇付建物」で、掘立柱の高床建築で瓦を葺きません。そしてこの大安殿は奈良時代の平城宮の内裏正殿につながっていく建物であります。

東南郭正殿は明らかに「大安殿」の平面を持ち、このような掘立柱・高床で檜皮葺きの屋根の伝統的な形に復元されています。

前期難波宮の内裏前殿も明らかに「大安殿」の系列に属していて、掘立柱建物で瓦を葺いていませんが、その復元された外観は後の藤原宮ときわめてよく似たものになっています。それは同じ掘立柱建物でありながら高床でなかった可能性のあること、建物の外周にこのような小さな掘立柱がめぐらされていて木製の基壇があった可能性のあることや唐の宮殿建築の影響を想定してこのような中国風の建築に復元したものでありますが、その本質は「大安殿」であります。東南郭正殿がその建築構造や様式からも大極殿のそれとは大きく違っていることがよくお分かりいただけたと思います。

ただ私は、藤原宮の大極殿は前期難波宮内裏前殿や飛鳥宮Ⅲ—B期の東南郭正殿とまったく無関係に成立したのではなく、その位置や機能の系譜を引きながらも、律令制に基づく最初の大極殿として大きな質的飛躍があったと考えます。

「我が国における大極殿は、従来の宮室構成殿舎の中に全く異質な存在として突然出現したのではなく、その持つべき機能は律令体制の整備と機をあわせつつ、従来のオホトノの系譜より分化されることよって、我が国独自の大極殿へと発展していった」とする石川千恵

子さんの考え（石川一九九〇）を支持したいと思います。

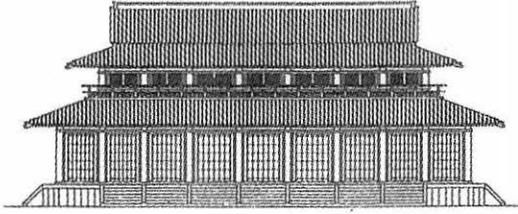
（3）朝堂院と曹司の成立

前期難波宮の多数（二四堂）の朝堂（庁）と広大な朝廷から成る区画の性格について吉川真司さんは、大化五年の「八省百官」の創設を機に、一四棟以上の朝堂が存する大規模な朝堂院を持つこと、広大な宮域内にいくつもの官衙（曹司）が置かれたことに難波長柄豊碕宮（前期難波宮）の先進性を認め、新たな中央政治機構の執務空間として朝堂（侍候・口頭政務）と曹司（実務処理・止宿）の双方を設けたため、王宮は突如として巨大化したと考えておられます（吉川一九九七）。前期難波宮から藤原宮に至る変遷の中で前期難波宮の段階で成立した朝堂院が飛鳥宮Ⅲ期の宮殿になぜ継承されなかったのでしょうか。

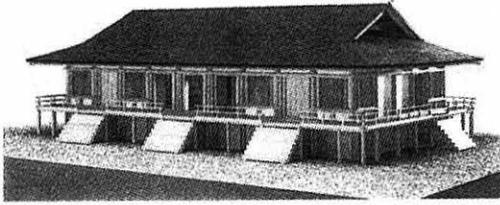
飛鳥では宮域外に分散していた国政機関（外廷機能）や国政を担う各豪族の邸宅の機能などが、難波遷都による新しい都の造営を機会に宮域内に統合されたことが、前期難波宮のような飛鳥宮をはるかにしのご空前の規模と構造を持つことになったと考えられます。

天皇の御在所である内裏の南には元日の朝賀の儀式などさまざまな儀式を行う場であるとともに、位を持つ官人が毎日出勤して政治を行う場である朝堂院のほか西方官衙や東方官衙などの役所群が一つの宮域内にまとめられたわけです。ちなみに西方官衙は「難波の大蔵」、東方官衙の三棟の倉庫を中心とする一角は朱鳥元年の火災で焼失を免れた「兵庫職」の遺構ではないかと考えています。

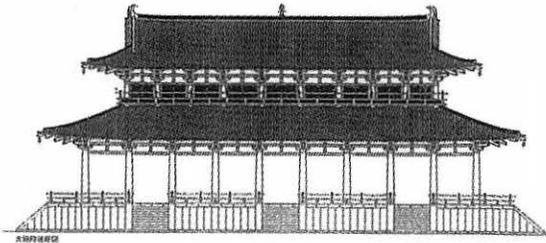
難波宮から藤原宮へ〔中尾〕



前期難波宮内裏前殿

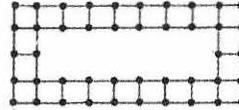


飛鳥宮Ⅲ-B期東南郭正殿



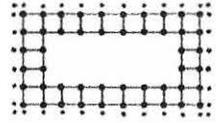
藤原宮大極殿

大極殿
(梁間二間四面庇付建物)

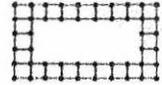


藤原宮大極殿

大安殿
(梁間三間四面庇付建物)

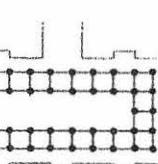
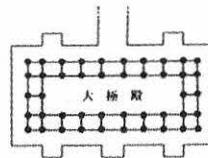


内裏前殿

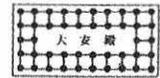


東南郭正殿

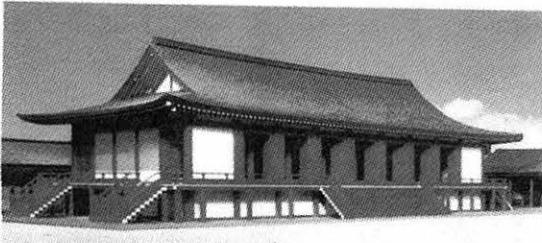
後期難波宮



平城宮第2次大極殿



内裏正殿



平城宮内裏正殿

図8 大極殿・大安殿の平面と建築様式

ところが、都が難波から飛鳥に帰りますと天皇の御在所である内裏の部分は建て替えられますが、宮域外に分散していた外廷機関はそのまま残るといふ飛鳥の伝統的な宮室の形が残されていたことが、前期難波宮のような広大な朝堂院が造られなかった理由ではないかと考えています。

図9は七世紀後半の飛鳥の状況を示していますが、飛鳥浄御原宮を中心とその宮域外に小墾田兵庫・後の民部省に当たる「民官」の役所、石神遺跡の饗宴施設、水落遺跡の時計台（漏刻）、飛鳥池遺跡の官営工房などが分散して存在していた様子がうかがわれます。

この線は浄御原宮のかつての推定宮域の北限を示していますが、そ



図9 飛鳥宮と分散する外廷官衙

の南北の長さは約七五〇mで、前期難波宮の南北の長さに匹敵します。最近の調査でその北限はさらに北側の飛鳥寺の寺地近くまで広がるということが明らかにされています。浄御原宮に前期難波宮のような朝堂院がないのは内郭南方が飛鳥川で限られているために造営の余地がなかったからと言われていますが、内郭の北側に大きな空間があるわけですから、内郭の位置を北に大きく寄せれば、内郭の南に前期難波宮の朝堂院を建設するだけの余地が充分とれたと思います。そこまでの大造はせず「大安殿」の新設にとどめたのは、やはり「新城」の造営が天武の本命であったからではないでしょうか。

こうした飛鳥宮時代の分散していた国政機関は、次の藤原宮では、前期難波宮と同じように宮域内に統合されることになりました。

隋・唐の中国都制の影響の下に成立した前期難波宮（難波長柄豊碕宮）は、藤原宮を経て平城宮に至る日本古代宮城制度の原型として画期的な意義を有する宮室であったと評価したいと思います。

以上、前期難波宮の段階から藤原宮の成立に至るまでの日本古代宮都の成立過程をめぐって、主として考古学的な成果に基づいて私の考えていることの一端をお話しました。講演ということもありませんが、今後論文として皆さんのご批評を得たいと思っております。ご静聴どうもありがとうございます。

【付記】

本稿は二〇〇九年（平成二〇）五月十六日の大阪市立大学日本史学会における講演原稿をまとめたものである。

【参考文献】

- ① 石川千恵子「古代大殿祭考」『日本歴史』五〇五号、一九九〇年
- ② 吉川真司「難波長柄豊碕宮の歴史的位置」『日本国家の史的特質 古代・中世』思文閣出版、一九九七年
- ③ 林部 均「古代宮都形成過程の研究」青木書店、二〇〇一年
- ④ 積山 洋「難波長柄豊碕宮と飛鳥浄御原宮―大極殿の成立をめぐって」『史大日本史』5号、二〇〇一年
- ⑤ 小澤 毅「日本古代宮都構造の研究」青木書店、二〇〇三年
- ⑥ 柴原永道男「天武天皇の複都制構想」『市大日本史』第六号二〇〇三年
- ⑦ 山本忠尚「祭殿から内裏正殿へ―梁間三間四面庇付建物の意義」『古代文化』五四四・五四五号、二〇〇四年
- ⑧ 吉川真司「王宮と官人社会」『列島の古代史3 社会集団と政治組織』岩波書店、二〇〇五年
- ⑨ 中尾芳治「日本都城研究の現状」中尾・佐藤興治・小笠原好彦編『古代日本と朝鮮の都城』ミネルヴァ書房、二〇〇七年
- ⑩ 『都城制研究（1）』奈良女子大学21世紀COEプログラム報告集第一六、二〇〇七年
- ⑪ 『都城制研究（2）』「宮中枢部の形成と展開―大極殿の成立をめぐって」奈良女子大学21世紀COEプログラム報告集第二三、二〇〇八年
- ⑫ 林部 均「飛鳥宮と藤原京」吉川弘文館、二〇〇八年
- ⑬ 中尾芳治「宮跡からさぐる孝徳朝―前期難波宮の実態」『大化改新と古代国家誕生』新人物往来社、二〇〇八年
- ⑭ 小澤 毅「藤原京の成立と構造をめぐる諸問題」
- ⑮ 井上正人「日本古代都城造営の史的意義―東アジア世界の歴史潮流の中で―」⑭⑮ともに王維坤・宇野隆夫編『古代東アジア交流の総合的研究』国

際日本文化研究センター共同研究報告、二〇〇九年

⑭ 植木 久「前期難波宮中枢部の諸問題―特に藤原宮と比較して」（都城制研究会発表資料）二〇〇九年

【挿図出典】

- 図1 小澤毅・参考文献⑭
 - 図2 林部 均「第6章 まとめ―古代宮都の中の飛鳥京跡―」（『飛鳥京跡』Ⅲ、二〇〇八年）所載図面を編集作成。
 - 図3 中尾芳治・参考文献⑬
 - 図4 佐藤 隆「古代難波地域の土器様相とその史的背景」『難波宮址の研究』第十一、（財）大阪市文化財協会、二〇〇〇年
 - 図5 唐長安城宮・皇城復元図は、妹尾達彦「長安の都市計画」（講談社選書メチエ、二〇〇一年）図三二
 - 図6 大阪歴史博物館「古代都市誕生展図録」表紙、二〇〇四年
 - 図7 図2より編集作成。
 - 図8 中尾作成。
 - 図9 相原嘉之「飛鳥古京から明日香へ―飛鳥地域における歴史的風土の形成過程―」（『明日香村文化財調査研究紀要』第6号、二〇〇七年）図1に加筆作成。
- 表1～3 中尾作成。

（元帝塚山学院大学）